

特集／障がいへの理解を深める 〈障害者週間：12/3～9〉

歩み寄る心 伝わる気持ち

12月3日から9日までは、「障害者週間」です。障がいのある人もない人も、ともに支えあって暮らすためには、市民ひとりひとりが障がいについて正しく理解することが大切です。

今回の特集では、大垣桜高校1年生の3人の生徒による介護実習の様をお伝えするほか、市の障がい福祉制度などを紹介します。



話して、触れて 多くのことを学ぶ

大垣桜高校福祉科の生徒3人が介護実習

大垣桜高校の1年生3人が同校の授業の一環として、11月6日から10日までの5日間、市内の障がい福祉サービス事業所である、かわなみ作業所で介護実習を行いました。

今回の介護実習では、同作業所の利用者に対する移動や食事などの生活の介助のほか、生産活動などを行いました。3人はさまざまな利用者たちと交流する中で、障がいがある人への理解を深めました。

共同作業で仲深める

生産活動では、不要になったCDプレーヤーなどの機械の解体をはじめ、ダンボール箱やハンガーの組み立てなどを行いました。

不要になった機械の解体=写真・右=では、利用者の行う解体の手順を確認しながら、共同作業をしました。



また、ハンガーの組み立て作業=写真・左=では、うつむいていた利用者に対し実習生が声をかける場面も。声をかけてもらったことでやる気を出して、実習生と集中して作業を進める様子が見られました。



寄り添って歩く

生活の介助では、車いすで移動する際の介助、視覚障がいがある人の歩行=写真=の介助のほか、食事のお手伝いなどを行いました。

移動の介助では、普段よりもゆっくり、周囲の状況や時刻をやさしく声をかけて伝えるなど、利用者の視点になってサポートする様子が見られました。



取材後記

さまざまな障がいがある人たちと時間をともにし、ふれあい、多くを学んだ実習生たち。相手の伝えたいことを読み取り、自分の伝えたいことを分かってもらうため、ときには紙に書いて、ときには身振り手振りでコミュニケーションを取る姿が印象的でした。

そんな実習生の姿勢に心を開き、仲を深めようとする利用者。そこには、お互いに歩み寄る気持ちがあり、その気持ちが心のバリアを取り払い、両者の距離を縮めていました。



5日間の実習を終えて――



伊藤翔太郎君



大西亮介君



瀬川敬翔君

5日間の介護実習を終えた大垣桜高校1年生の3人。初めての障がい福祉サービス事業所での実習で感じたことや学んだことなど、それぞれの思いを聞きました。

Q 実習初日、どのような思いでしたか？

伊藤君 以前、デイサービスの実習で高齢者の支援をしたことがありましたが、障がいのある人と関わるのは初めてでした。1日目に来てみて、利用者のみなさんはものすごく元気で、フレンドリーでした。実習前の不安が少し減りました。

大西君 僕もそうでした。初めは不安でしたが、皆さん関わりやすく、緊張もしばらくしたら、ほぐれました。

Q 障がいがある人と接する中で、気を付けたことは？

瀬川君 その人が何をどのように伝えたいのかということ意識していました。机をたたいたり、大きな声を出したりするには意味があって、何を訴えているのか、どういう感情なのかを理解しようと心がけていました。

大西君 利用者の視点に立つことを考えていました。車いすを押す場面では、振動を与えないよう心がけていました。